

## らっば亭奇譚集

SFセミナー2015 合宿企画出張版

### 今月の彼女

R・A・ラファティ

マンサード・モールニーは稀観書クラブ、蔵書家クラブ、愛書家クラブ、十七世紀の本ブッククラブ、十八世紀の本ブッククラブ、豪華本ブッククラブ、図書館本ブッククラブ、今月の料理本ブッククラブ、プレイボーイブッククラブ、今月のヘンテコ本ブッククラブの会員だった。さらには、やたらとある今月のレコードクラブのいくつか、名画大全集クラブ、世界一周ブックレットクラブ、チャイニーズシルクプリントクラブ、エキゾチックギフトクラブにも入会していた。

マンサードはまた、ちょっと変わったクラブの会員にもなっていた。毎日違ったソーセージを宅配してくれるクラブだ。ヤクヤガラガラヘビやオオナメケモノのソーセージもあって、こんなクラブはここだけだ。あの毎日宅配サラミソーセージクラブとは違うよ。まあ、その会員でもあったんだけど。

そして、とある厳選アダルト・ブッククラブ（いくつか入会している）から届いた本にはさみこまれてたその広告チラシをみたときも、即

座にサインして投函した。こうしてマンサードは今月の彼女クラブに入会したのだ。まったく知らなかったのだが、それは世界で最も新しく会員も限定された今月のクラブだった。メンバーはたったの三十人。

三日後に、美しくアートなカラー写真が届いたので、壁に貼ってみた。読書疲れで目がかすみ、包装紙に印刷されていた細かな注意書きを読みおとしたマンサードは、自分が十七日目のメンバーとなったことに気が付かなかった。別の日のメンバーに変更するにはすぐに申し立てる必要があったんだ。まあ、もし読んでいたとしても何もなかっただろうけど。マンサードみたいなやつにとっては、どの日だっておなじだ。

しかしその月十七日の夕刻になり、とびきりステキな若い娘が訪ねてきた。何月だったかは言えないよ。（もしあなたが三十人の会員のひとりだったら、その娘が誰なのかわかっちゃうからだ）目のかすみは治ったので、それが写真の女の子そのひとだとわかった。

その娘は優しくも情熱的にキスをすると、部屋にさがりこんだ。ウィークエンドバッグを聞き、小さいながら厳選されたアイテムを並べる。メリーランド・ライ・ウイスキーの五番。そそのムード・ミュージックのレコード何枚か。ちよっぴりだけど豪華なオードブルのセット。ネンブタールの錠剤は手のひらに一杯。そしてマンサードにはいったい何に使うのか見当も付かない小さな器具とかも。

「このクラブの特典がどんなものなのか誤解していたようなんだ。ホンモノの女の子がやってくるなんて思ってもみなかった」

「そうね、まったくもって、あたしはホンモノ。ここにサインして。したらすべてOK。早速あたしたちビジネスに取りかかれるってわけ。やがて請求書がくるから送金してね。それからチップ。喜んで払ってくれるってわかってるわよ。明日の朝、キャッシュでいただくわ」

「うん、非常に興味深いクラブだ。話し相手にホンモノの女の子を送ってくるなんて、なんて刺激的なんだろう」

「話し相手？ あなたお話だけする客なの？ 前にもひとりいたわね。九日目のひとがトーカーだったわ。でも彼って、ひとしきり話し終わったら後はあらまあステキーって感じで。あなたもそうなのかしら」

「ぼくがいままで入会したクラブでいちばんステキなやつかもなあ。いつもぼくの話聞いてくれる相手が欲しかったんだ。たいていのひとは、おかしな話だけど、ぼくにうんざりするみたいなんだ」

「どうして、おかしくなんてないわよ」

「ありがとう。君の返事には別の含みもありそうだけど。で、君の名前は？」

「ジンジャー」これは本当の名前じゃなかったし、実際に彼女が告げた名前とも違うんだけど、あなたが三〇人の会員のひとりである可能性があるるので教えるわけにはいかない。そして彼女は着替えにかかった。

「異性ヘテロジエナスの面前で脱衣するという行為は」マンサードは言った。「ぼくのような内気な西洋人にとって非日常なことなんだ。他の地域ではそうではないのかもしれないけど」

「いったい何の面前で言ったの、あなた」

「性別が異なる相手ってこと」

「あらまあ」彼女は薄手の黒いシルクだけの姿だ。

「君は知らないかもしれないが」マンサードは続けた。「シルク織りの生産はエーゲ海のコス島で始まったんだ。シルクの織物を中国から取り寄せて、より糸をすべてほぐしてばらばらにして、透けてみえるくらいの薄さに編み直したんだよ。この産業のはじまりを、だいたい紀元前三一二年とみなしているのかな」

「いいわ、つづけて」

「それから、広くエーゲ海中に向けて加工貿易が始まった。一世紀のうちには、ローマにまでも達したんだ」

「なんて賢いのかしら」

「いままで気付かなかったっていうのが信じられないけど、シルク織りにはある種の魅力があるんだなあ。隠しているようで、隠してないって言うか。って、何が言いたいのかわかる？」

「完璧にわかってるわよ。かわいいひと」

「まずは視覚的に。そしてほかの五感にはより微かな影響を及ぼして不思議に魅力的な。っていうか、誘惑的だ」

「そうなの。だと嬉しいな。キツイお酒はいかが？」

「お湯のタンブラーに数滴だけ垂らしてくれるかな。砂糖もほんのちよっぴり。なにごとにも節制が肝心だよ。僕の学説では、最初の酒の原料

となったのはライ麦の原種であるアイマー種じゃなく、葡萄でもない。そしてまた、ザクロでもない。ザクロは非常に古い果実なんだ。ただし古代ペルシャの果実ベークを正しくザクロと翻訳したらね。ポップによると果実ベークはマルメロを意味するとしたんだけど。これを飲み込むにはー」

「マルメロを飲み込めないってこと？　かわいいひと」

「マルメロの語源についてのポップの学説を飲み込めないってことだよ。僕の学説では、最初の酒はベークよりもさらに古代の果実から造られたんだ。それは中央アジア平原の小さなイチゴ。現代のトルキスタン語でこのイチゴをなんと呼ぶかも興味あるのならー」

「ふうん、そうなの。見てよ、チャーミングな王子様。どうしてあたしたちまだ始めないのかしら」

「いやぼくはもう始めているよ。ってか、もうエンジン全開だ。ぼくが話し始めたら、誰にも止められないよ。君みたいなステキな聞き手がいるのなら、一晩中だって話し続けられる」

「あらまあ！　カリプソでもかけてみていいかしら」

「どうぞどうぞ。カリプソはそもそもはムジーク・エスクラーベすなわち奴隷の音楽だったんだ。実のところ、チェスタトンにはジャズそのものが奴隷の音楽だと言っているね。そしてすべての奴隷音楽と同じく、その出自はあいまいなんだ。シンコペーションとインプロビゼーションの申し子であり、パークッションはいわばプレイメイトだね」

「あら、プレイメイトなの」

「自由の民による昔の素朴な唄とはまったく異なるんだ。ミス・ジンジャー、この騒がしい曲にあわせた君の動きはとても奇妙だね。まるでギリシア詩に描かれた高級娼婦<sup>ヘタイヤ</sup>みたいだ。君はヘタイラじゃないよね」

「あら、ステキなあなた。いったいなんなのかわかんないわ」

「ああ、君がそんな育ちのいいお嬢さんだったなんて。もちろん君はヘタイラとは違うよね。この分野の専門書を読んでたせいでぼくは三世紀にトリップしてみたんだ。現代でもヘタイラがいるのかどうかはあやしいね。今の言葉ではなんて言うんだろう。でもおそらくこの頃はみんな忙しくて、そんなこと考えもしないだろう」

ジンジャーは寄ってきて、マンサードの膝に乗った。

「マンサード。ダーリン、そろそろ話し疲れたでしょう。あたしは準備

OKよ」

「話し疲れただって。いや、ぼくに限って話し疲れることなんてないよ」

「九日目のひとはトーカーだったけど、ひとしきり話し終わった後は、あらまあステキーって」

「ぼくが話し終わるなんてことあるかな。ぼくのことうんざりするやつだって思わないステキな女の子と話す機会なんてなかったからなあ」

「あなたさえわかってたなら、ねえ。あなたさえー」

そして彼女のうつろになった緑の目はすぐに閉ざされ、眠りに落ちた。

「おやおや、眠っている女の子と話しするってのもなあ。そうだ、まだ起きているつもりで話しつづけよう」

そして彼は話し続けた。エフィソスの民が雄牛にくびきをかける方法について。(われわれが知っているウィップルツリーすなわち牛の引革を結びつける横木は近代のもので、たかだか千六百年くらいの歴史しかない)またエフィソスの民の用いた家畜突き棒の由来について解説した。タナグラの小さな彫像についても語り、窯業についてはじっくりと説明した。近代以前の火を熾す四通りの方法についても話した。それから、どういふわけかカリア人の埋葬の慣習に話題が移った。いったいぜんたい、なんでまたそんな話になったのかは誰にもわからないだろうね。これはとても大きなテーマだ。「深く掘り下げるテーマと言ってもいいだろうね」マンサードは眠れるジンジャーに囁いた。それから自分のジョークにくすぐす笑った。かれがジョークをとばすことなんて、滅多にない。

さて、何かに夢中になっていると時間はまたたくまに過ぎ去るものだ。マンサードは部屋の観測窓から星々が消え(ユーフォロスこと金星はまだ輝いていたけど)、夜が明けつつあるのに気付いた。

彼は優しくジンジャーを起こした。

「ああ、ステキなあなた、まだお話ししているの。どうなってるのかしら。いえいえ、朝食はいらないわ。ライ・ウイスキーを九杯ばかりぐつとやるから。それから走るの。どんなに走るかわかるかしら。あら、ありが

とう。たっぷりチップをはずんでいただいて。あ、そう言えって教えられてるの。効果はできめんよ」

彼女はドアのところで立ち止まった。

「聞いて、ピーチ・パイさん。このクラブに入会していても、毎月きっちりオススメの彼女の相手をしなくてもいいのよ。デューティーは年に四回だけだから、ちよくちよくパスしたらいいわ。でもめくらめっぽうじゃダメ。エイプリルとメイとジュニーは大丈夫だけど、オーガストはパスしてね。そしてとにかくノーベンバーだけは絶対パスしなさい。彼女にあなたお得意のお話ってのをしたら、ほんとどうなるかは保証できないわよ」

*Girl of the Month (unpublished) R. A. Lafferty*

さて、今回はSFセミナー合宿企画にちょっとしたオミヤゲを。ラフアテイの未刊行短篇です。まあありがちな艶笑小話みたいなネタをラフアテイが書いたかった！って珍品ですね。ちよつと自虐ネタっぽくもあつたりして。アンドリユー・ファアガスンにはダメ出しされてたけど、私はわりと好きだったりします。合宿だけに、「夜のラファテイ」をお届けしてみました。